

ロシア語男性名詞のアクセントパターンについて¹

渡部 直也

東京大学大学院総合文化研究科

1. はじめに

ロシア語は自由アクセントの言語に分類され、アクセントによって意味的対立が生じる場合も観察される。一方で実際の傾向としては、アクセントパターンに関する一定の法則性が指摘されてきた。名詞のアクセントについては、以下の3つのタイプに大別される(Зализняк 1977 など: 以降で示すタイプ分類は同書に基づく)。

- (1) a. 一貫して語幹にアクセントが生じる (タイプ A)。
- b. 一貫して語尾にアクセントが生じる² (タイプ B)。
- c. 形態によってアクセントが移動する。

これらの分布については、全体としてタイプ A が圧倒的多数を占めることが指摘されてきた (Idsardi 1992; Alderete 1999; Molczanow 他 2019 など, 2.1 節で詳述)。一方で後述のように、アクセントのゆれや通時的変化についても指摘があり、特に外来語・新語の男性名詞がタイプ A から他のタイプに移行する例が報告されている (Воронцова 1996)。また、多くの先行研究において示された数量的傾向では、音節数や使用頻度、語の形態的構造などについて十分に考察されておらず、再考の余地がある。

本稿では、ロシア語のいわゆる第2変化男性名詞(辞書形の末尾が子音であるもの: 語形変化の例は次節を参照)のアクセントパターンについて、音韻的・形態的要因や、語彙的性質、使用頻度といった諸要素を考慮しながら、近年におけるゆれや変化も含めた包括的な分析を行う。構成は以下の通りである。まず2節で関連する先行研究を概観しながら、研究背景を整理する。次に3節では、文法辞典や正音法辞典を対象に行った数量的調査について述べる。先行研究や今回の調査結果を踏まえ、4節では最適性理論の枠組みに基づいた現象の定式化を試みる。最後に5節で議論を総括する。

2. 背景

本節では、まず2.1節でロシア語のアクセント体系に関する先行研究を概観した後、2.2節ではアクセントを理論的に分析する枠組みとして、近年まで多くの研究で採用されている最適性理論の枠組みを導入する。最後に2.3節では、アクセントパターンのゆれや通時的変化について見る。

¹ 有益なご指摘・ご助言をくださった2名の査読者にこの場を借りて感謝申し上げる。本研究は科研費研究活動スタート支援(課題番号: 19K23034)の助成を受けている。

² 語尾がゼロの場合は語末(語幹末)にアクセントが現れる。

2.1. パターンの分布とデフォルトのアクセント

名詞のアクセントパターンについては(1)のように大きく分類されるが (Зализняк 1977), このうち第 2 変化の男性名詞について形態によってアクセント位置の移動するもの(1c)の大多数は, 単数の各形態で語幹にアクセントが現れ, 複数の各形態で語尾にアクセントが現れるパターン (タイプ C) である. なおこの中には, 複数主格の語尾が/-a/ (-a, -я) である男性名詞が含まれているが, 同語尾は必ずアクセントを有し, 複数の各斜格形においても語尾にアクセントが現れる. 本稿ではこれ以降タイプ C の男性名詞のうち, 複数主格の語尾が/-a/でないものをタイプ C1, /-a/であるものをタイプ C2 として区別する. この他, 複数主格 (及びそれと同形の複数対格) でも語幹にアクセントが現れるもの (タイプ E) も見られるが, 限定的である. また, 第二前置格語尾/-u/ (-y, -ю) はパターンによらずアクセントを有する (例: в лесу) が, これは語尾が元々有するアクセントであると考えられるため, 議論の対象としない. 表 1 に各パターンの例を示す. なおこれらのタイプの第 2 変化男性名詞については, 生格以外の各斜格形のアクセントは, 単数・複数それぞれについて生格に準じている.

	タイプ A	タイプ B	タイプ C1	タイプ C2	タイプ E
単数主格	дед 「祖父」	стол 「机」	сад 「庭園」	дом 「家」	год 「年」
単数生格	де́д-а	сто́л-а	са́д-а	до́м-а	го́д-а
複数主格	де́д-ы	сто́л-ы	са́д-ы	до́м-а	го́д-ы
複数生格	де́д-ов	сто́л-ов	са́д-ов	до́м-ов	го́д-ов

表 1: 第 2 変化男性名詞のアクセントパターン

こうしたパターンの分布について, Alderete (1999: 69) は Зализняк (1977) の文法辞典のデータからタイプ A が名詞全体の 92%を占めていると述べており, 他のパターンは語彙的に特殊なものとしている. なお Molczanow 他 (2019: 63) では高頻度語に限定したパターンの分布が示されているが, ここでもタイプ A が 74%と大多数を占めている. Alderete (1999: 69–70) ではさらに, 語幹に指定されているアクセントが優先されるためにタイプ A が生じる一方で, 語幹にアクセントが指定されていない (無アクセントの) 場合, 形態音韻論的制約によって語尾の第 1 音節にアクセントが生じると定式化された. 一方で Idsardi (1992: 110–111) は, タイプ A 及びタイプ B は語幹が基底において有するアクセントが表出することで実現されるとし, アクセント位置が移動する他のパターンについては語幹にアクセントが指定されておらず, 語尾が有するアクセントが現れるものであると分析している. 両分析は, 語幹の基底における性質が保持されるという説明がなされている点では一致しており, 語幹の音韻的性質の保持が接辞のそれよりも優先される通言語的傾向 (Beckman 1997) にあてはまるものである.

ただし, タイプ A が大多数を占めるという分析には問題点もある. 対象語には一定のア

クセントを有する音節数の多い外来語³や、接尾辞によってアクセントパターンが定まる語(後述)も含まれており、ロシア語の音韻体系全体においてタイプ A が好まれるないし無標なパターン⁴であると結論付けることには若干の疑問が残る。本研究では、音節数や語の内部構造も考慮に入れて、アクセントパターンの分布を再検討する(3節を参照)。

一方で、ロシア語におけるデフォルトのアクセント位置を明らかにする試みもなされてきた。Crosswhite 他(2003)の無意味語を用いた調査では、子音で終わる名詞は語末、母音で終わる名詞は次語末にそれぞれアクセントが現れる傾向が見られた。名詞では語幹末が子音であることから、同論文では語幹末のアクセントがデフォルトであるとし、形態音韻論的制約によってアクセントパターンを定式化した(次節で詳述)。安藤(2010)は、Crosswhite 他(2003)での問題点を改善した無意味語を用いた調査に加え、外来語辞典・正音法辞典のデータから、語幹末のアクセントが基本的なパターンであることを支持し、タイプ A の各語幹にアクセントを指定する必要性を否定した。Molczanow 他(2019)では表層性失読症の被験者を対象とした生産実験の結果、母音で終わる名詞については次語末にアクセントを置く誤りが一貫して確認されたのに対し、子音で終わる名詞については語末及び次語末にアクセントを置く誤りの双方が確認された。これについて、上述の先行研究と同様に語幹にアクセントを置く傾向を支持した上で、子音で終わる名詞については、語末に母音と子音とが連続する接尾辞を認識することで、次語末にもアクセントを置くこと論じている。一方で、語幹末にデフォルトのアクセントが現れる傾向を否定する研究もある。Lavitskaya and Kabak(2014)は、母音で終わる曲用しない新奇語でも次語末にアクセントが現れるという調査結果から同傾向を否定し、語末における強弱格フット(フットに関しては次節を参照)によって定式化した。確かに不変化名詞については、定義上それ全体を語幹と考えるのが妥当とも言える。しかしながら、ロシア語全体の中でこうした名詞は例外的なものであり、原則的には末尾の母音は語尾ないし接辞として認識されると考えられる。本稿では主としてロシア語本来の語形変化に従う名詞を対象に考察を行うため、Lavitskaya and Kabak(2014)の主張は採用せず、他の先行研究で主張されてきた語幹末アクセントの傾向を前提として議論を進める。

最後に、タイプ C のように単数各形と複数各形とでアクセント位置が異なるパターンについては、Alderete(1999:170-172)は一定のアクセントパターンを引き起こすいくつかの接辞による語形成と同様に、語尾の性質によって形態間に異化の生じる制約(Anti-faithfulness)によって説明した(次節を参照)。同論文ではまずタイプ C2 における複数主格の語尾/-a/などを例に挙げている。しかしながら、タイプ C1 についてはタイプ A ないし B と語尾は同一であることから、単一の音韻的原理によって説明することは不可能であると言える。

³ 後述するように、語幹末にアクセントが現れる語が大多数を占める。

⁴ 無標・有標の定義については議論の余地があり、本稿の分析ではこうした概念は採用しないこととする。なお、後述の最適性理論では「有標性制約」という用語が伝統的に用いられているが、同理論がこれによって何らかの有標性を直接定義するものではない。

2.2. 最適性理論によるアクセントの定式化

本節ではアクセントが理論的にどう分析されてきたのかについてさらに詳しく見ていく。具体的な分析の詳細は4.2-4.3節で述べる。音節構造とアクセントの関係について、特に最適性理論 (Prince and Smolensky 1993/2004) の枠組みにおいて多くの分析・提案がなされてきた。同枠組みでは、以下で述べるような諸制約がある言語において優先度に基づいて一定の順序付けがされており、制約の違反が最も深刻でない出力候補が最適であると評価される。アクセントによるリズムを分析する上で重要なのは韻脚 (フット) であり、これは2音節からなることが多い。こうした通言語的傾向は以下のような制約で定式化される。

- (2) FOOT-BINALITY (FT-BIN): 韻脚は2音節(ないし2モーラ)で形成されなければならない。
(Prince and Smolensky 2004: 56)

一方で言語によって、韻脚内のどちらの音節にアクセントが現れるか、また、語中のどの位置に韻脚が現れるかが異なる。ロシア語においては、右側にアクセントが現れる弱強格フット (iamb) であると言われており (Halle and Vergnaud 1987: 28-29; Crosswhite 2001: 72), 次のような構造となる。なお韻脚は“()”で、音節境界は“.”で示す。

- (3) *dopozna* 「道」の例: [(da.ró).gə]

ただし、単音節の語などで2音節韻脚が形成できない場合は1音節で形成される。

この枠組みにおいて2.1節で述べた語幹末のデフォルトのアクセントは、語幹末に弱強格フットが現れると言い換えることができる。こうした形態論的単位と音韻論的単位との関係性については、整列 (Alignment) 制約が提案されており (McCarthy and Prince 1993), ロシア語について Crosswhite 他 (2003) は次のような制約を仮定した。

- (4) ALIGN-R (stem, Ft): 語幹の右端と韻脚の右端 (=強勢音節) は一致しなければならない。
(cf. Crosswhite 他 2003: 160)

ただし4.2節で後述するように、語彙的に指定されたアクセント位置は保持され、同制約には違反することとなる。なお前節で言及したように、Alderete (1999: 69-70) はタイプBを形態音韻論的制約が作用することで生じるとしており、ここでも一種の整列制約が仮定されている。しかしながら3節以降の議論で述べるように、タイプBは一貫してタイプAよりも圧倒的に割合が低く、前者をロシア語全体で作用している何らかの制約の効果として分析することは妥当でないと言える。

最後に、タイプCのように形態によってアクセント位置が移動するパターンに対するAlderete (1999) の分析 (Crosswhite 他 2003 でも同分析を踏襲している) について概観する。同論文ではまず語の派生において特定の接辞によってアクセントパターンが定まる場合に着目し、派生元の基本形と派生語との間で同一位置でのアクセント表出を禁じる Anti-

faithfulness を仮定した. なおここでは, 最適性理論の基本的な枠組みで考慮される基底形と表層形との対照に加えて, 派生前後の語の表層形どうしを対照させている. こうした分析を名詞の曲用にも応用し, 単数形と複数形との間で Anti-faithfulness が作用することによってタイプ C (及び, 単数形で語尾にアクセント, 複数形で語幹にアクセントがそれぞれ生じるタイプ D) が現れると分析している. ここで問題となるのは, タイプ C2 のように特定の語尾を有する場合を除き, タイプ A ないし B と複数形の語尾は同一であり, 語の派生のように接辞によってアクセントパターンが生じると分析することには疑問が残る.

2.3. アクセントのゆれと変化

最後に, アクセントパターンの分布に関してさらに問題となる, 言語使用におけるアクセントのゆれや, 結果的に生じる通時的変化について言及しておく.

これまででも多くの記述や指摘はなされている. 正音法辞典においては, 複数のパターンを併記する場合, 一方のパターンを「許容される」(допуст.) とする場合, 及び, 一方のパターンを「非推奨」(нерек.) ないし「正しくない」(неправ.) などとする場合が見られる. Воронцова (1996: 313-314) はアクセントの「文法化」, すなわちアクセントが文法的機能を示す明確な指標となる傾向を指摘した. 特に, 分節音のレベルで同一の単数諸形と複数諸形との間でのアクセント位置による対立 (例: страны – страны) や, 単数曲用全体と複数曲用全体との間での対立を挙げている. 後者は男性名詞のアクセントパターンに関わるもので, パターン C に変化する事例 (例: склады, складов, ... → склады, складов, ...) が記述されている.

もう 1 つの傾向として指摘されているのは, 外来語借用における本来語化 (освоение) に伴うアクセントパターンのゆれや変化である (Воронцова 1996: 319–323). 原語のアクセントを保持するものとロシア語本来のパターンに従うものとのゆれを指摘する一方で, 近年 (1980 年代から 90 年代) 借入された語についてはまだ受容期間が短く, 原語のアクセントが一定程度保持される傾向を指摘している. なお, 安藤 (2010) は語尾による影響を認めながらも, 全体として 2.1 節でも述べた通り語幹末にあたる位置にアクセントが出現する傾向を指摘している. いずれにしてもアクセントパターンはタイプ A になるものが大多数であり, タイプ B や C については非常に少ないことが述べられている. ただし同箇所では指摘されていないが, 前述のタイプ C (特に C2) への変化については, 外来語由来の *-ep, -op* で終わる語が多く挙げられている.

3. 調査

前節で言及してきたように, Alderete (1999) では全体的にタイプ A が大多数を占めることが言われているものの, データには接辞によってアクセントパターンが定まる語や, 語幹末アクセントをはじめ一定のアクセントパターンが現れる外来語が大多数を占める, 音節数の多い語が含まれていた. また, 音節数や語の使用頻度による分析もなされていない. なお Molczanow 他 (2019) では高頻度語に限定した分布が示されているが, 使用頻度と名詞の活用パターンや音節数とを複合させた考察はされなかった. さらに, パターンの

ゆれや通時的変化を見るためには、近年の辞典と比較する必要がある。本節ではこうした問題を踏まえ、ロシア語男性名詞におけるアクセントパターンの分布と、近年のゆれや変化に関して行った文献調査について述べる。

3.1. 方法

本調査ではまず、Alderete (1999) でも用いられている Зализняк (1977) の文法辞典から、対象となる語のデータを収集した。男性名詞の表示があるもののうち、第2変化のものを抽出し、タイプ A, B, C 以外のパターン、複合語や外来語が圧倒的多数を占める語幹が4音節以上の語、副次強勢を有する複合語、一定のアクセントパターンが出現する接辞⁵-ок, -ик (-ник, -щик を含む), -ец, -як, -ач, -ун, -арь, -ин, -ист, -изм で終わる語、及び出没母音を含む単音節語幹のためにアクセント位置が一樣に定まる語⁶を除外した。

その上で、語幹の音節数ごとに分類するとともに、Ляшевская, Шаров (2009) によるロシア語ナショナルコーパスに基づいた頻度辞典 (*Частотный словарь современного русского языка на материалах Национального корпуса русского языка*) に基づき、名詞全体における頻度順位に基づいて分類した。なお、同辞典に掲載されていないものについては全て、掲載されているものよりも頻度順位が低いものとして扱った。

さらに近年の傾向を見るため、Зализняк (1977) の文法辞典のデータを Еськова 他 (2015) の正音法辞典のデータと比較した。後者のみに掲載されている語については別途考察の対象とした。

3.2. 結果

はじめに、Зализняк (1977) の文法辞典を対象としたアクセントパターンの調査結果は表 2a-c の通りである。

頻度順位	タイプ A	タイプ B	タイプ C1	タイプ C2	計
1000 位以上	49 (55.06%)	13 (14.61%)	18 (20.22%)	9 (10.11%)	89
1001–3000	87 (64.93%)	22 (16.42%)	19 (14.18%)	6 (4.48%)	134
3001–5000	75 (66.96%)	22 (19.64%)	13 (11.61%)	2 (1.79%)	112
5001–10000	139 (74.33%)	32 (17.11%)	13 (6.95%)	3 (1.6%)	187
10000 位以下	522 (81.06%)	75 (11.65%)	41 (6.37%)	6 (0.93%)	644
全体	872 (74.79%)	164 (14.07%)	104 (8.92%)	26 (2.23%)	1166

表 2a: 頻度順位ごとのアクセントパターンの分布 (1 音節語幹)

⁵ -ист, -изм については、常に同接辞にアクセントが現れる。一方で、-як, -ач, -ун, -арь については、常に語尾にアクセントが現れる。-ок, -ец は出没母音を含んでいるため、同接辞にアクセントが現れる場合、出没母音が消滅される形態においては語尾にアクセントが現れ (すなわち、タイプ B)、そうでない場合はタイプ A となる。-ик についても、同接辞にアクセントがある場合は原則的にタイプ B、そうでない場合はタイプ A となる。

⁶ 例: рот 「口」 (~рта, рту...)

頻度順位	タイプ A	タイプ B	タイプ C1	タイプ C2	計
1000 位以上	123 (82.55%)	14 (9.4%)	0 (0%)	12 (8.05%)	149
1001–3000	216 (84.05%)	23 (8.95%)	0 (0%)	18 (7%)	257
3001–5000	219 (87.6%)	17 (6.8%)	2 (0.8%)	12 (4.8%)	250
5001–10000	489 (85.19%)	54 (9.41%)	5 (0.87%)	26 (4.53%)	574
10000 位以下	1776 (86.13%)	218 (10.57%)	9 (0.44%)	59 (2.86%)	2062
全体	2823 (85.75%)	326 (9.9%)	16 (0.49%)	127 (3.86%)	3292

表 2b: 頻度順位ごとのアクセントパターンの分布 (2 音節語幹)

頻度順位	タイプ A	タイプ B	タイプ C1	タイプ C2	計
1000 位以上	51 (91.07%)	1 (1.79%)	0 (0%)	4 (7.14%)	56
1001–3000	115 (97.46%)	2 (1.69%)	0 (0%)	1 (0.85%)	118
3001–5000	122 (97.6%)	3 (2.4%)	0 (0%)	0 (0%)	125
5001–10000	294 (99.32%)	1 (0.34%)	0 (0%)	1 (0.34%)	296
10000 位以下	1773 (99.05%)	15 (0.84%)	0 (0%)	2 (0.11%)	1790
全体	2355 (98.74%)	22 (0.92%)	0 (0%)	8 (0.34%)	2385

表 2c: 頻度順位ごとのアクセントパターンの分布 (3 音節語幹)

全体として先行研究でも指摘されている通り、タイプ A が大多数を占めている。タイプ B は語幹が 1–2 音節の名詞で一定程度確認されるのに対し、3 音節の名詞では非常に少なかった。またカイ二乗検定の結果、全体の比率と頻度ごとの比率との間に有意差はなく (p 値が最も低かったのは、2 音節語幹で頻度順位が 3001–5000 の場合で、 $\chi^2=2.2152, p=.1367$)、頻度との関連性は確認できなかった。タイプ C1 は専ら単音節語幹の名詞に見られ、頻度の高い名詞では比率が高い。カイ二乗検定の結果、頻度順位が 3000 位以上の語はそれ以外の語よりもタイプ C1 の比率が有意に高かった ($\chi^2=18.83, p<.001$)。一方でタイプ C2 は、単音節語幹の名詞ではタイプ C1 よりも少ないのに対し、2–3 音節語幹の名詞においても一定程度確認され、頻度の高い名詞で比率が高かった。タイプ C1 と同様に頻度順位が 3000 位以上の語とそれ以外の語とを比較すると、単音節語幹 ($\chi^2=23.086, p<.001$)、2 音節語幹 ($\chi^2=14.504, p<.001$) とともに有意差が確認された。なお 3 音節語幹の名詞については統計分析に十分な数の例が確認されていない。

次に、Зализняк (1977) の文法辞典と Еськова 他 (2015) の正音法辞典との対照結果を表 3 に示す。後者でゆれが指摘されているものはスラッシュで双方を示し、「及び」(*и*)、「許容される」(*допуст.*) の場合には何も記号を付さず、「推奨されない」(*не рек.*)、「正しくない」(*неправ.*) の場合にはアスタリスク (*) を付した。なお、語数が 5 未満のものは「その他」とした。通時的変化が生じていると思われるものに着目すると、規範的でないとされるものも含めて、A のみ見られた語について C2 とのゆれが生じる例が多く確認さ

れる。これは Воронцова (1996) でも指摘されているものである。なお、頻度についてはここでは考慮していないが、「専門的な会話で (*в профессионал. речи*)」ゆれが確認されているものが多く、当該分野において頻繁に使われている語であると言える。一方で、C2 が A とのゆれを生じる逆の例も割合としては高い。その他、A が B とのゆれを生じるもの、及びその逆の変化も一定数確認されたが、いずれも規範的とは見なされていない場合が多かった。

Зализняк (1977)	Еськова 他 (2015)	語数	割合
A	A	5473	98.06%
"	A/C2	42	0.75%
"	A/*C2	30	0.54%
"	A/*B	11	0.20%
"	A/*C1	5	0.09%
"	C2	5	0.09%
"	その他	15	0.27%
A	計	5581	(100%)
B	B	442	93.64%
"	B/*A	19	4.03%
"	B/A	7	1.48%
"	その他	4	0.85%
B	計	472	(100%)
C1	C1	75	94.94%
"	その他	4	5.06%
C1	計	79	(100%)
C2	C2	84	84.85%
"	C2/A	10	10.10%
"	その他	5	5.05%
C2	計	99	(100%)

表 3: Зализняк (1977) の文法辞典と Еськова 他 (2015) の正音法辞典との対照結果

最後に、Зализняк (1977) の文法辞典に掲載されておらず、Еськова 他 (2015) の正音法辞典で記述されている語について見る。圧倒的多数はタイプ A であったため、他のパターンに分類される語を表 4 に列挙する。なお上述の調査では語幹が 3 音節以下の語に限定していたが、ここでは数量的分析を行わないため、参考のために音節数にかかわらず全ての語を載せている。

タイプ	語例
B	<i>военспец, жлоб, хит</i>
C2	<i>баллер, военфельдшер, дурдом, контрактенор, корети, мессер, опер, сидор, соредатор, субинспектор</i>
A/C2	<i>дембель, шевер, штекер</i>

表 4: Еськова 他 (2015) の正音法辞典のみに掲載されている語 (タイプ A を除く)

ここからわかるのはまず、C2 である名詞の大多数が、接尾辞 *-ep, -op* で終わっていることである。同接尾辞は従来語においても C2 のパターンを引き起こしやすいものである。他のパターンとなる例は非常に少なく、これは 2.2 節で述べた先行研究の記述と一致している。タイプ B のうち *военспец* 「軍事専門家」、*жлоб* 「粗野な人、けちな人」は俗語であって新語ではないため、新語で同パターンとなるのは *хит* 「ヒット (流行)」のみである⁷。

3.3. 考察

調査結果を総括すると、全体的にタイプ A が優勢である一方で、語幹の音節数や語の使用頻度によるばらつきが確認された。タイプ B 及び C1 は専ら音節数の少ない名詞に見られ、後者は特に単音節語幹で頻度の高い名詞に集中している。一方でタイプ C2 は音節数の影響も若干見られるが、頻度の高い名詞では一貫して観察された。また、従来タイプ A であったものが C2 も許容される例や、近年の新語において C2 のパターンを見せる例が確認された。

上記の結果から次のことが言える。まず音節数との関係について、音節数の多い語で語尾にアクセントが現れにくいことがわかる。音韻論的に一般化すると、強勢のない音節の連続が避けられるとも言える。なお音節数の多い名詞でもタイプ C2 は一部見られるが、同パターンは複数主格をはじめ語尾の有する性質によって生じるものと考えられる。次に頻度との関係については、頻度の高い名詞でタイプ C の名詞の割合が高いことがわかる。同パターンは、Воронцова (1996: 313–314) が指摘しているアクセントによって単数・複数を弁別する傾向に合致するものであるが、頻度の高い名詞で生じやすいことを考えると、ロシア語の形態音韻論的体系において好まれるものであると言える。ただし、近年のアクセントパターンのゆれや通時的変化においては、タイプ C2 への変化は見られるものの、タイプ C1 への変化は確認されない。さらにタイプ C1 は単音節語幹の名詞が大多数を占めており、音節数との関係も無視できない。また、タイプ C2 からタイプ A に変化するものもある。タイプ C2 の出現は特に接尾辞 *-ep, -op* で終わっている名詞に顕著であり、音韻論的傾向というよりは語彙的な性質が強く作用している面もある。

以上を踏まえ次節では、主に最適性理論の枠組みに基づき、観察されたパターンの理論的定式化を試みる。

⁷ *шурп* という語も確認されたが、意味・用例は不明である。

4. 理論的定式化

4.1. 基底におけるアクセント指定

まず本節では、2.1 節で述べた先行研究と前節の調査結果を踏まえ、各タイプの名詞が基底においてどのようなアクセントが指定されているかについて考える。前提としてロシア語は自由アクセントであり、前節で見たような分布の傾向はあるものの、基本的に語の様々な位置にアクセントが現れうる。分析の詳細は次節以降で述べるが、こうした自由アクセントが可能となるのは、基底に指定されたアクセントが、それが何らかの音韻的制約などによって忌避されない限り保持されるためである。一方 2.1 節で見たように、全体的分布としてはタイプ A が大多数を占め、特に語幹末のアクセントがデフォルトと考えられる。これは 2.2 節で述べた(4)のような音韻的制約が作用しているためであると考えられるが、仮に同制約が基底アクセントを保持させる制約よりも優先されるとすると、自由アクセントにはならない。このことから、デフォルトのパターンについては基底においてアクセント位置が指定されていないと考えられる。

では、タイプ A について一貫してアクセント無指定を仮定すべきなのであろうか。今回の調査結果を踏まえると、単音節語幹名詞で特に頻度の高い語については、タイプ A は大多数を占めてはならず、音韻的原理によって語幹末アクセントが好まれるとは言いきれない。さらに問題となるのは、同種の名詞に特徴的なタイプ C1 の存在である。仮にこれが基底において指定されている何らかの語彙的特性によって生じているとすれば、なぜ複数音節語幹ではほとんど観察されないのかが不明瞭となる。したがって単音節語幹にのみ適用され、かつ語幹末アクセントよりも優先される音韻的原理が関連していると言える。ただし上述のように基底においてアクセントが指定されている場合はそれが優先される。以上を踏まえると、単音節語幹についてはタイプ A の語は語幹においてアクセントが指定されており、タイプ C1 の語はアクセント無指定であると考えられる。語幹が 2 音節以上の場合は、語幹末にアクセントが出現するタイプ A は音韻的に好まれるものであり、基底において指定する必要性は低いと言える。ただしそれ以外の位置に生じる場合は、基底において指定しなければならないと考えられる。

タイプ B についても、Idsardi (1992) のように語幹に指定されたアクセントであるという説がある一方で、Alderete (1999) のように語幹にアクセントは無指定で音韻的傾向によって生じるものであるという説が提唱されている。今回の調査結果を見ると、タイプ B は一貫してタイプ A よりも例が明らかに少なく、何らかの音韻的傾向によって語尾にアクセントが生じると考えるのは妥当でない。また、単音節語幹については上述したタイプ C1 が生じる音韻的傾向があり、語尾に一貫してアクセントが生じる音韻的傾向は見出せない。このことから Idsardi (1992) に従い、語幹の後ろにアクセントが指定されていると仮定する。

最後にタイプ C であるが、タイプ C1 については上述のように無指定であるべきである。タイプ C2 についてはまず、アクセントを有する複数形の語尾が語彙的に指定されていると考えられ、単数形でのアクセント位置に着目する必要がある。単音節語幹については結果的に語幹末アクセントとなることから、基底においてアクセントを指定する必要はない。

一方で複数音節語幹については、タイプ A と同様に、語幹末アクセントの場合は無指定で問題ないが、それ以外は基底において指定されていなければならない。

以上をまとめると、(5)のようになる。

(5) 第2 変化男性名詞の基底におけるアクセント指定

- a. タイプ A: /CVC-/ (単音節語幹) ; /...CVCVC-/⁸ (複数音節語幹)
(語幹末アクセントでない場合: /...CVCVC-/; /...CVCVCVC-/; etc.)
- b. タイプ B: /...CVC-/
- c. タイプ C1: /CVC-/
- d. タイプ C2: /...CVC-/ [NOM.PL = /-á/]
(単数形で語幹末アクセントでない場合: /...CVCVC-/; /...CVCVCVC-/; etc.)

4.2. 各タイプの定式化

(5)の基底表示を踏まえて、本節では最適性理論の枠組みで定式化を試みる。まず関連する基本的な制約は以下の通りである。(6a, b)は2.2 節で説明した通りであるが、こうしたアクセント位置の傾向を定める制約(有標性制約)が仮定される一方で、(6c)のように入力(基底)のアクセント位置を保持させる制約(忠実性制約)が仮定される。

(6) アクセントに関する基本的制約群

- a. FT-BIN: 韻脚は2 音節で形成されなければならない。(=2)
- b. ALIGN-R (stem, Ft): 語幹の右端と韻脚の右端(=強勢音節)は一致しなければならない。(=4)
- c. MAX-ACC: 入力において指定されているアクセントを削除してはならない。

以下、アクセントパターンごとに分析を行う。なおこれ以降の音声表記においては、議論に関わらないため母音弱化は示さないこととする。

まずタイプ A について、単音節語幹については基底において語幹に指定されたアクセントが(6c)の制約によって保持されると考えられる(タイプ C1 と比較する際に後述)。複数音節語幹の名詞については、デフォルトの語幹末アクセントが(6b)によって生じる場合と、語幹の末尾以外の位置に指定されたアクセントが(6c)によって保持される場合とがある。ここで、前節で仮定したような基底において指定されたアクセントが優先されることから、(6c)の方がランキングが高いと考えられる。(7)に分析例を示す。なお簡略化のため、以降の評価表では各出力候補について単数生格と複数主格のみを提示する。まず(7i)については入力(評価表の左端に示す)においてアクセント位置が指定されていないため、MAX-ACCに違反することはない。タイプ A で語頭にアクセントが現れる候補(7ib)、タイプ B の候補

⁸ /.../はさらにアクセントのないCVの連続がある場合も含んでいることを示す。

(7ic), タイプ C の候補(7id)は, ALIGN-R (stem, Ft)に違反する⁹ため, 除外される. 結果として語幹末にアクセントが現れるタイプ A (7ia)が最適であると判断される.

(7) タイプ A (複数音節語幹)

- i. /otv'jet-/ 「返答」 → otv'jet-a, otv'jet-i
- ii. /v'ibor-/ 「選択」 → v'ibor-a, v'ibor-i

		MAX-ACC	ALIGN-R (stem, Ft)	FT-BIN
i. /otv'jet-/	a. → otv'jet-a, otv'jet-i			
	b. ótv'jet-a, ótv'jet-i		*!*	**
	c. otv'jet-á, otv'jet-í		*!*	
	d. otv'jet-a, otv'jet-í		*!	
ii. /v'ibor-/	a. vibór-a, vibór-i	*!*		
	b. → v'ibor-a, v'ibor-i		**	**
	c. v'ibor-á, v'ibor-í	*!*	**	
	d. v'ibor-a, v'ibor-í	*!	**	*

一方で(7ii)では入力において語頭にアクセントが指定されているため, それが出力に出現していない候補(7iia, c, d)は MAX-ACC に違反する. 同制約は他の制約よりも優先度が高い¹⁰ため, これらの候補が除外され, 結果として語頭にアクセントが常に現れる候補(7iib)が最適となる.

次にタイプ B について考える. 基本的にはタイプ A で基底にアクセントが指定されている場合と同様で, そのアクセントが保持されるものである. ただし前節の調査結果からわかるように, 3 音節語幹の名詞では非常に例が少なかった. このことから, (8)のような制約が作用していると仮定される.

(8) *LAPSE: 強勢のない音節が 3 つ以上連続してはならない.

(cf. Elenbaas and Kager 1999: 282¹¹)

仮に語幹の後ろにアクセントが指定されていても, 同制約がアクセント保持の制約(6c)よりも優先されることで, 語尾におけるアクセントの出現が避けられると考えられる. なお後述するタイプ C2 の語尾は, 語幹が 3 音節以上でも語尾のアクセントが優先されるが,

⁹ 制約への違反は*で示す. 単数主格と複数主格双方で違反する場合は*を 2 つ書いている. 当該の候補が除外されるような違反についてはさらに!を添え, そうした制約よりも優先度の低い制約の違反の有無については, 評価に影響しないため灰色を付した.

¹⁰ 評価表において, 制約間に実線が引かれている場合は, それよりも左側の制約が右側の制約よりも優先度が高いことを示す. 一方で破線の場合は, 左右の制約の優先度に差は認められない.

¹¹ 同論文では, 強勢のない音節が 2 つ以上連続した場合に違反する制約を仮定しているが, 本稿での制約はこれを応用したものである.

これについては語尾そのものを保持する制約が作用していると考えられる(4.3節を参照)。(9)に分析例を示す。(9i)は単音節語幹で語幹の後ろにアクセントが指定されており、語尾にアクセントが現れても*LAPSEに違反することはない。語幹にアクセントが現れる候補(9ia, 9ic)はMAX-ACCに違反するが、同制約は(7)で示したのと同様にALIGN-R(stem, Ft)よりも優先されるため、タイプB(9ib)が最適であると判断される。一方で(9ii)は3音節語幹で語幹の後ろにアクセントが指定されている仮想の名詞である¹²。タイプB(9iib)あるいはタイプC(9iic)は優先度の高い*LAPSEに違反するため除外され、タイプA(9iia)が最適となる。

(9) タイプB

i. /stól-/ 「机」 → stol-á, stol-í

ii. /...CVCVCVC'/ (仮想の3音節語幹) → CVCVCVC'-a, CVCVCVC'-i

		*LAPSE	MAX-ACC	ALIGN-R
i. /stól-/	a. stól-a, stól-i		*!*	
	b. → stol-á, stol-í			**
	c. stól-a, stol-í		*!	*
ii./...CVCVCVC'/	a. → CVCVCVC'-a, CVCVCVC'-i		**	
	b. CVCVCVC'-á, CVCVCVC'-í	*!*		**
	c. CVCVCVC'-a, CVCVCVC'-i	*!	*	*

それではタイプCはどのように分析できるであろうか。C2については、頻度との関連性は別途考慮する必要があるものの、基本的には語尾の性質が保持されることによって生じるものと考えられる(次節を参照)。では語尾が他のタイプと同一であるC1はいかなる原理によって出現するのか。ここで考えるべきことは、同パターンが専ら単音節語幹で観察される傾向である。2.2節で述べたように、ロシア語では(10a)のようにアクセントのある音節を右側に有する弱強格フットが形成されるが、単音節語幹でアクセントが語幹に生じる場合は、(10b)に示すように2音節フットを形成することができなくなり、FT-BIN(6a)に違反することとなる。

- (10) a. 単音節語幹で語尾にアクセントが現れる場合: (CV.CV́) 例: sadí
 b. 単音節語幹で語幹にアクセントが現れる場合: (CV́).CV 例: dédi

言い換えると、語尾にアクセントが出現するのは(6a)への違反を回避するためであると仮定できる。

¹² 現実的にはタイプAの名詞についてこうした基底形を仮定する必要はないが、最適性理論で音韻的傾向を実証するにあたっては、理論上入力の基底形によらず一貫した出力が予測されることを示さなければならない。

しかしその場合、なぜ単数各形では語幹にアクセントが現れるのであろうか。考えられるのは、Воронцова (1996:313–314) でも指摘されているアクセントによる単数と複数の弁別である。言い換えれば、単数各形・複数各形それぞれの間ではアクセント位置が同一であることが望ましい。単数主格（及びそれと同形の単数対格）ではゼロ語尾のため、必然的に語幹にアクセントが生じるが、これに合わせるために単数斜格でも語幹にアクセントが生じるのではないかと考えることができる。語形変化の中での音韻的統一性 (Paradigm Uniformity) について、McCarthy (2005) は最適性理論の枠組みで、語形変化全体を出力候補とし、変化形間で音韻的に異なる場合に違反する制約を仮定した。ロシア語の名詞アクセントについては、次のように仮定できる。

(11) PU/Acc-sg: 単数各形の間でアクセント位置は同一でなければならない。

なお、タイプ A ではアクセント位置が指定されており、(6a)よりも忠実性制約(6c)が優先されるために、常に語幹にアクセントが現れると考えられる。(12)に分析例を示す。

(12) タイプ C1 とタイプ A (単音節語幹) の比較

- i. /sad-/ 「庭園」 → sád-a, sad-í (タイプ C1)
- ii. /déd-/ 「祖父」 → déd-a, déd-i (タイプ A)

		MAX-ACC	PU/ACC-SG	FT-BIN
i. /sad-/	a. sád-a, sád-i			**!
	b. sad-á, sad-í		*!	
	c. → sád-a, sad-í			*
ii. /déd-/	a. → déd-a, déd-i			**
	b. dèd-á, dèd-í	*!*	*	
	c. déd-a, dèd-í	*!		*

(12i)では入力においてアクセント位置が指定されていないため、MAX-ACC に違反しない。タイプ B (12ib)は PU/Acc-sg に違反し、同制約が FT-BIN よりも優先されるために除外される。最後に FT-BIN への違反は、タイプ A (12ia)は単数形・複数形それぞれについて生じ、タイプ C1 (12ic)は単数形にのみ生じる。このためタイプ C1 が最適な候補となる。一方で (12ii)では入力において語幹にアクセントが指定されており、(7ii)と同様に、タイプ B (12iib)及びタイプ C1 (12iic)は MAX-ACC への違反によって除外され、タイプ A (12iia)が最適であると判断される。

4.3. タイプ C と頻度との関係性

3.2 節の調査結果からわかるように、タイプ C は使用頻度の高い名詞の間で顕著に見られた。言い換えれば、使用頻度の高くない名詞については、単数各形と複数各形との間に

おけるアクセント位置の交替が避けられる傾向がある。前節でタイプ C1 を分析するにあたって、単数曲用の中でアクセント位置が(11)のような制約によって統一されることを述べた。この理論を拡張すると、頻度の高くない名詞については、名詞曲用全体における音韻的統一性を求める次のような制約が作用していると考えられることができる。

(13) PU/Acc-N: 名詞曲用においてアクセント位置は同一でなければならない。

語彙的特性によって音韻的傾向が異なる現象は通言語的に見られ、最適性理論の枠組みにおいても様々な研究がなされてきた。Ito and Mester (1999) は日本語を対象に、和語・漢語・外来語といった語種の違いや、さらに外来語については定着度の違いによって音韻現象が異なることを指摘し、各語彙分類についてのみ作用する制約を仮定することで分析を行った。今回問題としているタイプ C については、使用頻度の高い語に対する(13)の制約は優先度が低く、そうでない語については同制約の優先度が高い¹³と考えられる。前者の語彙を freqN, 後者を infreqN と表示すると、(14)のような制約ランキングで一般化される (>> は左の制約が右の制約よりも優先度が高いことを示す)。

(14) PU/Acc-infreqN >> タイプ C を引き起こす制約 >> PU/Acc-freqN

まず(15)において、単音節語幹の名詞についてタイプ C1 の回避を定式化する。

(15) タイプ C1 と頻度との関連性

- i. /sad-/ 「庭園」 (頻度順位: 353) → sád-a, sad-í (= 12i)
- ii. /buk-/ 「ブナ」 (頻度順位: 8425) → búk-a, buk-í

		PU/infreqN	PU/Acc-SG	FT-BIN	PU/freqN
i. /sad-/	a. sád-a, sád-í			**!	
	b. sad-á, sad-í		*!		
	c. → sád-a, sad-í			*	*
ii. /buk-/	a. → búk-a, buk-í			**	
	b. buk-á, buk-í		*!		
	c. búk-a, buk-í	*!		*	

(15i)は(12i)の再掲であるが、頻度順位が高いため PU/Acc-infreqN に違反せず、タイプ C1 (15ic)が最適となる。一方(15ii)は頻度順位が低いために、基底にアクセント指定がなかった

¹³ 頻度の高い語と低い語との明確な境界はここでは定めていない。後述するように、Ito and Mester (1999) など提案されている制約の適用範囲の分類は、話者の有する語彙情報に基づいたカテゴリ化であり、数量的頻度そのものを考慮しているものではない。数量的頻度とアクセントパターンとの関係については、今後の研究課題としたい。

としても PU/ACC-infreqN に違反するタイプ C1 (15iic)が除外され、タイプ B(15iib)は同程度優先度の高い PU/ACC-SG に違反するため除外される。結果として、より優先度の低い FT-BIN にのみ違反するタイプ A (15iia)が最適となる。

一方でタイプ C2 についてであるが、ここで前提となるのは、複数主格の語尾 (-a) にアクセントが指定されていることであり、その性質は語幹の基底形に指定されているアクセントよりも優先されると考えられる。このことから、語尾そのものを保持する(16)のような制約が仮定され、MAX-ACC よりも優先されると考えられる。なお、語幹が3音節以上の場合、語尾のアクセントは*LAPSE にも違反することから、(16)は同制約よりも優先される。

(16) MAX-MORPH(EME): 入力において指定されている形態素を削除してはならない。

しかしながら語の使用頻度が低い場合は PU/ACC-infreqN が優先されるために同語尾の表出が回避されると考えられる。無論タイプ A (あるいはタイプ B) でしか現れない名詞については、入力において複数主格の語尾が/-a/であるということにはならないが、仮にそうした基底形が入力されたとしてもタイプ C2 は除外されるということである。言い換えれば、頻度の高くない名詞については、タイプ C2 とのゆれ、ないし同タイプへの変化が生じにくい。(17)ではわかりやすい例として、同複数主格語尾が現れやすい-ep, -op で終わる職業や道具などを表す名詞を例に挙げて分析例を示す。

(17) タイプ C2 と頻度との関連性

- i. /proféssor-/ 「教授」 (頻度順位: 442) → proféssor-a, professor-á
- ii. /sprínter-/ 「短距離走者」 (頻度順位: 19875) → sprínter-a, sprinter-i

		PU/ACC-infreqN	PU/ACC-SG	MAX-MORPH	*LAPSE	MAX-ACC	PU/ACC-freqN
i. /proféssor-/ [NOM.PL = /-á/]	a. proféssor-a, professor-i			*!			
	b. professor-á, professor-á		*!		**	**	
	c. → proféssor-a, professor-á				*	*	*
ii. /sprínter-/ [NOM.PL = /-á/]	a. → sprínter-a, sprinter-i			*			
	b. sprinter-á, sprinter-á		*!		**	**	
	c. sprinter-a, sprinter-á	*!			*	*	

(17i)は頻度順位が高いため PU/ACC-infreqN に違反しない。タイプ C1 の出現 (15i)と同様に、PU/ACC-SG に違反する候補 (17ib)が除外される。ここでタイプ A(17ia)は複数主格語尾 /-a/のアクセントが削除されているため MAX-MORPH に違反するが、同制約はタイプ C2 (17ic)の違反する*LAPSE よりも優先度が高いため、後者が最適となる。一方(17ii)は頻度順位

が低いために PU/Acc-infreqN に違反するタイプ C2 (17iic) が除外され、タイプ B (17iib) は同程度優先度の高い PU/Acc-sg に違反するため除外される。結果として、より優先度の低い MAX-MORPH にのみ違反するタイプ A (17iia) が最適となる¹⁴。

なおここでは議論の簡略化のため頻度辞典に基づいた順位を示して分析を行ったが、3.2 節で述べた通り、専門的な会話において C2 とのゆれが生じる場合があり、こうした特定の文脈においては頻度の高い語として認識され、PU/Acc-infreqN に違反しないものと考えられる。また逆にタイプ C2 がタイプ A とのゆれを見せる場合も一定程度観察されたが、これについては通時的に語の使用頻度が低下している可能性が示唆される。Ito and Mester (1999) など で提案されている語彙の下位分類は、本来語・外来語などの語源、あるいは語の使用頻度や定着度といった客観的な尺度にある程度基づくものの、本来的には各話者の語彙知識において主観的にカテゴリ化されたものである。このため、話者によって異なるカテゴリとして解釈されることにより、話者間のゆれも生じることとなる。

5. 結論

本稿では第2 変化男性名詞におけるアクセントパターンの分布を再検討し、理論的分析を行った。先行研究で指摘されてきたように、全体としてはタイプ A が大多数を占めていたが、語幹の音節数や語の使用頻度ごとに分類すると、分布に大きな偏りが確認された。タイプ B やタイプ C1 は音節数の多い語では非常に例が少なく、これについては、アクセントのない音節の連続や単音節韻脚を回避させる音韻的な制約が作用していることを主張した。また、タイプ C は特に頻度の高い語に集中しており、頻度の高くない語には曲用全体においてアクセント位置の統一を求める制約が作用していることを指摘した。

3.2 節において、単数形と複数形との弁別が顕著になる傾向を指摘する Воронцова (1996: 313–314) の先行研究を見たが、第2 変化男性名詞に関しては、タイプ C のみが語の使用頻度と関係していることから全体的な傾向とは言えず、むしろ単数・複数にかかわらずアクセント位置が統一される傾向も見られた。各形態について見ると、タイプ C2、すなわち複数主格語尾が /-a/ である場合を除いて語尾が重複することはなく、形態の弁別のためにアクセント位置を異化させる必要がないと言える。一方で第1 変化女性名詞や第2 変化中性名詞の場合、分節音については同一の語尾 (単数生格 *рукі, слова* と複数主格 *руки, слова* など) が見られるため、アクセントによって弁別することが求められる可能性がある。ただし本稿の考察と同様に、音節数や語の使用頻度を考慮すべきであるため、今後の課題としたい。

最後に、語の頻度による影響について述べておきたい。頻繁に使われる語については親密度が高く、話者の持つ語彙 (レキシコン) の中でも中心的な位置づけがされていると推察される。4.3 節で Ito and Mester (1999) の先行研究を挙げ、語彙的特性によって異なる音韻パターンが生じる場合があることを述べたが、一般に新語や外来語など言語において定

¹⁴ 語尾 /-a/ がアクセントを失って表出する候補も理論上可能であるが、語尾の特性や、単数生格との同音回避によって除外されると考えられる。

着度の低い語彙については、従来の音韻的傾向に沿わない傾向が指摘されている。最適性理論の枠組みでは、ある言語の音韻的傾向は、有標性制約によってそれ以外の様々な候補が除外されるために生じると定式化される。一方で新語・外来語に特異的なパターンは、それらに特有の忠実性制約が、当該言語で本来優先される有標性制約よりもさらに優先されることによって生じるのである。なおここで重要なのは元々の語源ではなく、受け入れ側言語における語の定着度ないし親密度であると考えられる。本稿ではタイプ C が頻度の高くない名詞では避けられ、アクセント位置が固定される傾向を指摘したが、これも親密度の高くない名詞において一種の忠実性（具体的にはアクセント位置の統一性）が作用しているという点で、通言語的傾向に沿うものであると言える。今後の研究では、他の曲用パターンや他の品詞におけるアクセント体系、さらには他言語におけるパターンも踏まえながら、さらなる一般化を試みたい。

参考文献

- 安藤智子 (2010) 「現代ロシア語名詞アクセント法にかかわる形態論的・音韻論的条件の関係について」, 『富山大学人文学部紀要』 53, 25–49.
- Воронцова В. Л.* Активные процессы в области ударения. // *Русский язык конца XX столетия.* / Под ред. Е. А. Земской. М.: Языки русской культуры, 1996.
- Еськова Н. А., Борунова С. Н., Воронцова В. Л.* Орфоэпический словарь русского языка: произношение, ударение, грамматические формы: свыше 70000 слов. / Под ред. Н. А. Еськовой. М.: АСТ, 2015.
- Зализняк А. А.* Грамматический словарь русского языка. М.: Русский язык, 1977.
- Ляшевская О. Н., Шаров С. А.* Частотный словарь современного русского языка (на материалах Национального корпуса русского языка). М.: Азбуковник, 2009. Электронная версия издания: <http://dict.ruslang.ru/freq.php>
- Alderete, John D. 1999. Morphologically Governed Accent in Optimality Theory. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts Amherst.
- Beckman, Jill N. 1997. Positional Faithfulness, Positional Neutralization and Shona Vowel Harmony. *Phonology* 14. 1–46.
- Crosswhite, Katherine. 2001. *Vowel Reduction in Optimality Theory*. New York: Routledge.
- Crosswhite, Katherine, John Alderete, Tim Beasley and Vita Markman. 2003. Morphological Effects on Default Stress in Novel Russian Words. *WCCFL* 22. 151–164.
- Elenbaas, Nine and René Kager. 1999. Ternary Rhythm and the Lapse Constraint. *Phonology* 16. 273–329.
- Halle, Morris and Jean-Roger Vergnaud. 1987. *An Essay on Stress*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Idsardi, William J. 1992. The Computation of Prosody. Ph.D. dissertation, MIT.
- Ito, Junko and Armin Mester. 1999. The Phonological Lexicon. *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Natsuko Tsujimura, 62–100. Oxford: Blackwell.

- Lavitskaya, Yulia and Barış Kabak. 2014. Phonological Default in the Lexical Stress System of Russian: Evidence from Noun Declension. *Lingua* 150. 363–385.
- McCarthy, John J. 2005. Optimal Paradigms. *Paradigms in Phonological Theory*, ed. by Laura J. Downing, T. Alan Hall and Renate Raffelsiefen, 170–210. Oxford: Oxford University Press.
- McCarthy, John J. and Alan S. Prince. 1993. Generalized Alignment. *Yearbook of Morphology 1993*, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 79–153. Dordrecht: Kluwer.
- Molczanow, Janina, Ekaterina Iskra, Olga Dragoy, Richard Wiese and Ulrike Domahs. 2019. Default Stress Assignment in Russian: Evidence from Acquired Surface Dyslexia. *Phonology* 36. 61–90.
- Prince, Alan S. and Paul Smolensky. 1993/2004. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. New York: Blackwell.

(わたべ・なおや)